教職課程センター紀要　第５号　181-187 ページ、2020 年 12 月
Jour. Center Teacher Develop. Edu. Res., Daito Bunka Univ., No.5 181-187, 2020
研究ノート

人格の完成から個性の地獄へ

－教育の基礎理論や生徒指導に関する科目の授業分析に焦点化して－

From “Perfection of Personality” to “a hell of Individuality”：Focusing on The Analysis of University Lectures as “Basic Subjects of Education” and “Student Guidance”

秋山　茂幸

Shigeyuki AKIYAMA

Key words:アイデンティティ、入試の就活化、飼い慣らされる個性、個性の自己責任論、自己を AI 化する教師

１．はじめに：人格の完成から個性の探求へ

教育基本法によれば、「教育は、人格の完成を目指し」ているわけだが、目指すべき人格の完成とは、一体どういったものだろうか。今の学生は、この言葉を見てどのようなことを思うのだろうか。現在、私たちは「人格の完成」なる言葉を提起した田中耕太郎が思い描いていた世界とは、随分と離れた場所に立っている[小谷 2014]。

現代を生きる人間にはすでにイメージし難くなっているが、戦後の教育学には、「誰でもこんな人格を目指すべきだ」という理想像が前提に存在していた。すなわち、真、善、美などの絶対価値の実現を追求することが目指され、学問的には矢川徳光のマルクス主義的人格論などにおける精神労働と肉体労働の統一としての全面発達論が大きな影響力を持った。しかし、次第に「みんながこんな人格を目指すべきだ」といったような規範志向への懐疑が広がりはじめ、戦後直後の普遍的人格論から 1970 年代にはアイデンティティ論が教育の世界に徐々に浸透していくことになる [1]。つまり、普遍的に人間とはどういうものかという教育の終着点を規定して、そこからあるべき教育を考えるという思考の枠組みが終焉を迎え、個々人にとっての「自分らしさ」の探求を援助する営みこそが教育であるという認識が一般的なものとなっていった [2]。

この「子どもが自分の内側の個性を発見して磨き上げ、自ら自由に人生を創作していくというプロセスを援助する営みとしての教育」という考え方、つまり「個性をベースとした教育論」をめぐって、今日どのような問いが提起されているか。小論では、文献研究というよりは筆者の授業経験をもとに学生の声、生きたコトバに頼りながら、個性に関する問題についての主要な論点の覚書を作成したいと思う。以下では、何人かの学生が提出してくれたコメントの骨になる部分をワンフレーズで示しながら、簡単なコメントを付す形で叙述をすすめていきたい。

２．個性論の諸相

・日本の教育は画一的だからもっと個性を重視せよ

まず個性論の出発点は、多くの場合この場所に立脚している。特に市井の教育論の主張の多くは、このテーマの変奏である。例えば、まずカリキュラムの問題を扱うとき、「詰め込み型の教育からアクティブラーニング型へ」という文脈で個性というキーワードは繰り返し登場する。新しい大学入学共通テストも、同様の時代的要請が背景にあるだろう。点数主義や偏差値教育が、これまで繰り返し批判の対象としてやり玉にあがってきたことは周知の事柄である。そして、校則の問題。管理教育に対する批判は 1980 年代に既にずいぶんと行われている。しかし近年、それと同様の問題がブラック校則という形で亡霊

のように蘇っている。くわえて、不登校やフリースクールといったオルタナティブ・スクール、さらにはホームスクーリングのような既存の学校制度それ自体を相対化するような新しい教育のかたち。そこでは、やはりこれまでの正統とされてきた日本の学校教育が、標準化された均質で画一的なものとして批判され、その抑圧性が告発され、より個別性を重視し多様な教育機会を保障するような教育の必要性が指摘される。

これらは、日本では1980年代あたりからイリッチやフーコーなどの論者を参照しておこなわれた近代教育批判の反復作業である。画一的で正統とされる「ふつう」から排除され、ネガティブなアイデンティティを付与されたマイノリティの人々が、自らが保有する特性をポジティブなものへと反転させる装置として個性という言葉が使われることが多い[3]。

・個性はすべてをフラットにしてしまう可能性がある

注意しておくべきは、支配的な学校文化から逸脱した、やんちゃな『野郎ども』[ポール・ウィリス 1985]としてのあり方が「それも一つの個性」だとして肯定されてしまうようなときに、本来であるならば社会的な支援が必要な領域に手が伸びなくなる――もしくはより根源的な社会的価値観の転換が必要な問題を看過してしまう――という事態が発生しかねないことであろう。そのほかにも「障がいは個性である」と（特に当事者以外の人間が）規定することも同様の問題性をはらんでいるだろう。

・資本主義が求める個性と民主主義が求める個性

よく指摘されるように、実際の教育改革における個性重視という方向性は、1980年代の臨時教育審議会からスタートしている。臨教審による個性称揚の背景には、教育の自由化・民営化・私企業化という大きな流れがあると指摘されている［大内 2020］。つまり、ポスト工業社会における人材養成という必要から個性が企業社会によって上から要請されている側面がある[山田 2006]。これを、ここでは「ポスト工業社会を生きるための個性」と呼んでおく。他方で、ブラック校則や日本の学校制度そのものの画一性に対して下から告発し、より子どもたちの個性や多様性を重視せよという訴えの動きがある。これを、ここでは「多文化共生社会を生きるための個性」と呼んでおきたい。

この二つの個性のうち、前者はネオリベラルの人々が訴えているものであり、後者はリベラルの側が訴えてきたものである。問題は、「詰め込み型の教育でテストの点だけを機械的に評価するだけではなく、個性や主体性などを評価した方がより人間的なのではないか」というリベラル側の主張が、容易にネオリベラルの側に取り込まれてしまうということだろう[4]。同様に、近代学校の画一性批判として参照されてきたポストモダン教育学や近代教育学批判の言説も、ネオリベラルの人々の物言いと容易に共振してしまう側面がある。

まずは、この「ポスト工業社会を生きるための個性」と「多文化共生社会を生きるための個性」の二つが切り分けられないまま渾然一体となって、1980年代以降の教育改革を支配してきたことを確認しておく[5]。

・企業社会が求める個性は馴致無害化された個性である

社会人に求められる資質においても、教育者が生徒に求める資質においても、現在「主体性」が大事だと言われるが、主体性にもいろいろあり「空気を読まずに協調性を壊すような（ある意味で革命的・秩序破壊的な）主体性」は歓迎されない。推奨される企業や教師が求めるような馴致され無害化された主体性のことを「忖度する主体性」[苅谷 2020]と指摘する声もある。そのとき不定形であった個性は、企業社会の内部で競争に生き残れるように最適化された個性へと鋳型に嵌め込まれていくだろう。

・個性を評価すると個性がなくなる逆説

大学が就職予備校化していく昨今、極端な話「企業が評価する個性や人間性を持った自分」になることに、大学生活の４年間のほとんどの努力を注ぐという人も出てくるかもしれない。さらにその前段階における「入試のシューカツ化」は、中等教育レベルでも同様の事態を引き起こすだろう。皮肉なことに、個性を評価の俎上に載せようとすると、その個性が型にはまって陳腐化し、「個性」ではなくなってゆくという逆説が生じることになる。

・評価や監視の目が個性にまで及ぶ気持ち悪さ

教育社会学者の本田由紀は、生きる力、人間力、個性などの能力が要請される社会について、以下のように述べている。「単に勉強していればよいだけではなく、意欲や創造性、柔軟な対人関係能力までもが日々の生活において不断に求められる状況は「社会」が「個人」を裸にし、そのむき出しの柔らかい存在のすべてを動員し活用しようとする状況に他ならない」[本田 2005]。学校というフォーマルな制度が個人の日常生活における内面や心の領域にまで踏み込んで、個性の有無や質の善し悪しを

評価し検閲することは、どこまで許されるのだろうか。

・個性のあるなしは自己責任か？

コミュニケーション能力をはじめ非認知能力の多くは、個人の内部に実体のように存在する能力ではなく、状況や文脈といった場に依存して変化する能力である。ある子どもが、A 先生の前では大人しいのに、B 先生の前では生き生きとして個性を発揮しているといったような状況は、教育現場では頻繁に見られることだろう。現象学者のメルロ＝ポンティは「大人と子どもは、向かい合わせて立てられた二枚の鏡のように、お互いを無限に映し合う」と言っている[6]。つまり、子ども（もしくは人一般）の個性というのは、それがわかるようになった見方や文脈に左右されている。そうである以上、個性を状況・環境から切り離し、その有無や多寡を個に内在する能力の問題として扱い、自己責任へと帰すことの問題性について敏感であらねばならないだろう[7]。

・現在以上の個性重視は、ただでさえ競争の圧力が低下しているいま、子どもたちの学力を底抜けさせる

近年、私大はもちろん国立大も推薦・ＡＯ入試を拡大させている[8]。難関大学においては、基礎学力も担保された上で探求型授業に相性のよい個性的な学生が集まっているが、すべての大学で競争システムが働いているわけではない。学生の確保と経営の安定という事情からＡＯ入試を広げる大学もあるだろう。勉強の基礎的なレベルで躓いてしまった子どもに対して、個性の称揚が「できないのも個性」という話になり放置されてしまう危険もあるだろう。

・型にはめた後に型を破って出てくるものこそが個性

「プロ教師の会」で著名になった諏訪哲二は、個性について次のように言っている。「市民形成（「社会化」）のプロセスで潰されてしまうような「個性」は潰されるべきである（中略）「社会化」されているあいだになくなってしまうようなものは「個性」ではない。まさに「個性」が「個性」でありうるために社会化が必要なのである。「個性」は育てられたり教育されるものではない」[諏訪 2005: 231]。諏訪は、学校の役割はあくまで社会化であって、個性は学校の営みに還元されないものとして浮上してきたときに、はじめて個性として認められると考えている。もちろん、これには「個性の小さく貧弱な芽を育てることを学校教育でも目指していくべきであり、子どもを『似たような形に整え』て均質化し、個性を潰すようでは多様性に富んだ社会はつくれない」という批判もありうるだろう。

・個性は学校ではなく家庭や自分自身で伸ばすものだ

1980 年代以降の教育改革における個性論の隆盛をまとまって分析した論集として有名なのは、『教育学年報 4 個性という幻想』(1995) であろう。この中で評論家の小浜逸郎は、教育の世界で「個性」「個性」とラッパが吹かれ、右も左も画一性を目の敵にするようになった背景には、教育の自己不安があるという。すなわち、「教育が凡庸さや画一性の再生産であるということに自信がもてないのである。だが、なぜそう開き直ってはいけないのか？もともと公教育が人間の育成にかかわれるのは、人間の共通性に関する部分にほぼかぎられているといってよい」[小浜 1995]。公教育が個性を育てるなどというのは分不相応な思い上がりなのだろうか。

・個性を伸ばす教育は金がかかる

個性や人間力を重視する選抜方法をとればとるほど、家庭環境に左右されて格差が拡大するという懸念が以前から表明されている[9]。

筆者の授業内では、ＡＯ入試で入学した学生が、ＡＯというシステムは親の資産や文化資本の影響が一般入試以上に顕著に出ると教えてくれることがしばしばある。アピールポイントとして留学できるような財力の有無はもちろんのこと、ＡＯ入試対策に特化した塾なども都市圏に存在し――そういう意味では経済レベルだけでなく、都市と地方の格差も大きい――学費もかなり高額なようである。教育社会学者の広田照幸は、「個に応じた教育」というのがリベラルな教育論のアキレス腱だと繰り返し警鐘を鳴らし、小学校段階で将来が限定されてしまうような「分化した社会化」、不平等な教育につながる危険があると指摘している[広田 2019]。

点数主義や知識の詰め込み主義の方が、階層間の流動性（シャッフル機能）を高め、格差の固定化を防ぎ、選抜される側の公平感が担保され学びのモチベーションがあがるという指摘もなされている。近代の画一的な教育は、ある意味では平等でみんなにやさしいのかもしれない。

・個性とは自分の内側に発見される「ダイヤの原石」ではなく他者との比較のなかで培っていくもの

個性を大事にする生き方を説いた言葉の中でとても印象的で有名なものに、スティーブ・ジョブズによるスタ

ンフォード大卒業式（2005 年 6 月）のスピーチがある。ジョブズは、次のように言っている。「あなた方の時間は限られています。だから、本意でない人生を生きて時間を無駄にしないでください。ドグマにとらわれてはいけない。それは他人の考えに従って生きることと同じです。他人の考えに溺れるあまり、あなた方の内なる声がかき消されないように。そして何より大事なのは、自分の心と直観に従う勇気を持つことです。あなた方の心や直観は、自分が本当は何をしたいのかもう知っているはず。ほかのことは二の次で構わないのです」[10]。この感動的なスピーチで注目すべきは、「内なる声」や「心と直観」といった言葉である。ジョブズが言うのは、個性とは、その人自身の内側で発見されるダイヤの原石のようなもので、誰しもそういった原石を持っているのだから、外野の声に惑わされず自己の深淵から湧き上がってくる声に耳を傾けることの大切さである。しかし、何が自分の個性であるのかは、他人と比較してこそはじめて浮き彫りになってくるとも言える。他者の存在が希薄すぎる個性論は、内面探索の無限後退へと陥る危険もある。

・1 人のジョブズの周りには 99 人の凡人が必要だ

ポスト工業社会で、誰もがシンボリック・アナリストや創造力の必要な仕事に就けるわけではない。そういった一握りのクリエイティブな人間を支える普通の人間が周囲にたくさんいてこそ社会は回っていく。

・個性の尊重というのも一つの強制である

「凡庸でありたい」もしくは「特別でなくともよい」という価値観を持つ人にとっては、「個性的であれ」と繰り返し煽り立てられることは苦痛以外の何ものでもない。

・傷つかない個性の肥大化によるモラトリアムの延長

「自分の内側にはダイヤの原石があるはずだ」という思いを大事に抱えながら、それが傷つくのを怖れて、他者の前で審査されないまま時間が過ぎると、自己の内部で万能感が肥大化してしまうことがある。これをこじらせると、「いつか本気になればすごいことができる」という無根拠な万能感を抱いたまま、いつまでもモラトリアムを過ごすようなことになりかねない。万能感はどこかで壁に突き当たる必要がある(精神分析における「去勢」の問題)。

・個性は人を縛り付けるものである

「自分らしさ」を根拠づけてくれる個性こそが、転じて個人をその中に閉じ込め縛りつけてしまう、という皮肉が存在する。一例として、タレントの牧村朝子さんは、「LGBT もう名乗りません」(『朝日新聞』2016 年 4 月 30 日、夕刊）という新聞記事の中で、次のように語っている。「『世界には男と女しかいない』という二分法に苦しめられ、その柵を壊そうと闘ってきた人々が LGBT。でも、今度は『LGBT であるか否か』で新たな柵が生まれているように見える・・・もうどこにも閉じ込めないで。LGBT らしいあり方を求められたくなんかないし、『LGBT 当事者としての意見』だなんて持ってはいないのです。私は私でしかありません」。LGBT という概念・カテゴリー・帰属集団がなければ、牧村さんは「自分が何者であるのか」という問いの前に何の手がかりもなく、ただ佇むだけになってしまい、「異常」というレッテルを貼られ、自己否定に陥り、アイデンティティの負のループに沈んでいたかもしれない。それが、LGBT という名を獲得し、帰属集団を得たことで、いったん自己肯定と他者承認の正のループに入ることができた。ところが、すべての個性は個人を束縛するレッテルに変化してしまう可能性を持つ。牧村さんは、「LGBT の○○さん」という固定的な見方をされることを拒んだ。「私は私である」と。

ある特性を自分の個性だと規定して「線を引く」という行為は、常にその外側と内側を生み出す。これを帰属集団の問題として考えると、外側の人間を排除することで内側の人間の結束を固くする効果がある。そうやって内側の人間にアイデンティティを保証する一方で、人をその集団に縛り付ける。これは特に、ナショナリズムの問題として顕著にあらわれるだろう。民族、国家、宗教にアイデンティティ（誇り、存在証明、帰属意識）を強く持つことは、生きる支えであると同時に、独善的・排他的な偏見を生み、線の外側の他者への憎しみをつくりだしてしまう可能性もある。

・個性は成長する

『不登校新聞』におけるタレントのりゅうちぇるさんのインタビューが印象的であった。「僕は「自分の色」を塗りかえてもいいと思っています。この話はニュアンスで受け取ってほしいんですが、その人の基盤となる色はあります。それでも人間は生きている以上、色は塗り替えられていくんです。僕自身、テレビに出始めたころは、ヘアバンドとチークのスタイルでしたけど、今は変わってきました。自分のために自分を貫くのも大切だけど、ときには変化があってもいいんです」[全国不登校新聞社編 2020]。

このりゅうちぇるさんの話には、個性なるものが固定した静的なものではないこと、そして常に成長しダイナミックに変化する可能性があることが示唆されている。現代の若者（というか現代人）は、自分自身の「キャラ」というものに、ややもすると縛られてしまう。しかし、りゅうちぇるさんの言葉は、自分が自分の周りに創り上げた個性に縛られず、それが窮屈になったらいつでも脱ぎ捨ててよいのだというメッセージになっている。

・何度も「キャラ変」していい

通時的なレベル、心理社会的なレベル、双方において、一貫した個性なるものを放棄する考え方に若者の共感が集まることが多い。つまり、一年前と今の個性が違ってもよいし、A さんと会っているときに出てくる個性と、B さんと会っているときに出てくる個性が違っていてもよい。というより、そもそも一貫性を持った個性なるものに拘ると現代社会では生きにくくなるのではないかという発想である [11]。他方で、それでも「わたしは一貫して同じわたしである」という自己の斉一性への希求も容易に否定できるものではない。一方で個性から解放されること、他方で個性という中心へと収束していくこと、この二重性の運動そのものが個性という言葉には内在しているのかもしれない [12]。

・個性という自分で自分をジャッジし続ける地獄

事程左様に個性とは曖昧なものだ。個性、主体性、人間力、コミュニケーション能力といった能力が評価の俎上に載せられることは、子どもや若者にとって点数主義・偏差値主義・管理主義などの画一性・均一性からの解放である反面、新たな過酷さ、生きづらさを現出させている。このあたりを繰り返し自身の作品で描いているのが小説家の朝井リョウである。「自分の個性、自分らしさを大事にと言われていますが、その個性や自分らしさが何なのか、実は誰にもわからないところに、平成らしい『見えない対立』の種が眠っていると思いました。小説の中ではまず、運動会の組み体操と棒倒しがなくなり、テストの順位が発表されなくなっていく描写を入口として書きました。それは、世界から順位をつけられる苦しみを手放す代わりに、自分で自分を見つけなければならない終わりのない旅の始まりの部分です。（中略）私は多様性という言葉から、自分で自分のことを決めていい快適さと同時に、自分で自分の意義や価値を見出していかなくてはならない地獄も受け取った実感があります。決めつけるようにジャッジしてくる存在がいないから、『自分はあの人よりもダメ』とか『この人よりはまだマシ』とか、日々、自分で自分をジャッジし続ける地獄」[13]。個性や多様性の称揚は、個人の内面への無限の掘り返し作業を要求し、そこで何も手にできなかった人間に不安と焦り、自己否定感を喚起させる。人格の完成なる教育目的の“暑苦しさ”から自由になった人間は、自ら個性や価値を発見して己の人生を創作しなければ「よく（充実して）生きている」という自己認識を得られなくなってまった。これは新たな地獄である。その帰結が、反動的に、数字や生産性（コストパフォーマンス）といった明確に数字化可能なものに依存していく心理への傾倒としてあらわれるかもしれない [14]。人は不透明な世界で不断に自己を模索し続けられるほど強くはない。

３．おわりに：自己を AI 化する教師

2020 年度前期、オンライン授業が実施される中で、個人的に授業運営で力を注いだのはフィードバックの作成であった。おそらく、今後オンライン授業や AI 授業が発達したとき、講義だけなら日本全国で同じ科目を様々な学校で実施しているので、その中の一番上手いスター講師の授業をビデオにでも撮って日本全国で見ればよくなる。「教壇に立って講義するのが教師である」という既成のイメージは、今後数年で大きく変わる可能性がある。では、そのとき一人一人の教師の役割は何か。それは、目の前の名前がある一人一人の子どもに合うような“個別の”働きかけをすることだと、とりあえずは言える。筆者個人は、授業参加者のコメントを大きな文脈の中に位置づけ直し、提示してくれたものとは異なる視点を提供することで、参加者に葛藤を生じさせるようなフィードバックを作成することを理想として描きながら、授業をすすめた。本小論は、そのプロセスで参加者のみなさんからもらった個性論をめぐるさまざまな視点を簡略に素描したものであり、今後より充実したフィードバックを可能とするために、この覚書をさらに肉付けしていければと思う。

このように考えて、ここまで「よりよいフィードバックのための地図作り」をしてきて気付いたことだが、このような作業はフィードバックのためのデータベース作りであると換言することも可能だろう。参加者が、「このようなコメントをしてきたら、別の視点からこのようなリプライの提示が可能である」といったようなフィードバック・コメントのプールづくりである。ところで、筆者は授業参加者のコメントが個性的であることを期待し

ているのだが、ネット上のどこかで拾ったようなコメントを提示されるとがっかりしてしまうことがある。AI では代えがきかないような個性や創造性を大事にして欲しいと思う。筆者も授業を担当する側として、個性や創造性を持った教師でありたいと願う。

しかし、この社会の中で生きていて、この社会の教育のあり方に「最適化」していこうとする自分がいる。教育のコストパフォーマンスを考えると、自分の振るまいが AI 化とでも言うべき方向に向かっているのを感じる。すでに人格の完成像を喪失し、個性なる曖昧なものに踊らされる地獄を生きる我々にとって、「個性とはデータベースから引き出した要素の順列組み合わせの束のことすぎない」という時代がやってくるのだろうか。小論の作業を通じて、教育の営みの中で、教える側が（学ぶ側も）自分たち自身を AI 化してしまうように自己彫琢してしまうような「自己の AI 化」とでもいったような現象に知らない間に滑り落ちているのではないかという怖れを感じることになった。

引用・参照文献

秋山茂幸 2016 「教育における自由と強制のディレンマ―シティズンシップ教育と勝田守一の思想について―」『大東文化大学教職課程センター紀要』第 1 号

吉澤昇 1988 「教育学はどのように生まれ変わってきたのか―教育学部総合科目講義（案）―」東京大学教育学部教育哲学・教育史研究室『研究室紀要』

吉澤昇 2010 「神学と人間学と宗教教育 ： デカルトと「ルーダンの悪魔つき」（1634）から、フロイトの宗教批判まで(1)」東京大学大学院教育学研究科基礎教育学研究室『研究室紀要』

小谷由美 2014 「戦後教育思想史における田中耕太郎の教育目的論 ： 『教育基本法の理論』の考察を中心に」『日本女子大学大学院人間社会研究科紀要（20），17-30』

ポール・ウィリス 1985 『ハマータウンの野郎ども　学校への反抗・労働への順応』熊沢誠・山田潤訳、筑摩書房

山田昌弘 2006『新平等社会―「希望格差」を超えて―』文藝春秋

本田由紀 2005 『多元化する「能力」と日本社会―ハイパーメリトクラシー化のなかで』NTT 出版

松下佳代 2010 『＜新しい能力＞は教育を変えるか―能力・リテラシー・コンピテンシー』ミネルヴァ書房

広田照幸 2019 『教育改革のやめ方』岩波書店

大内裕和 2020 『教育・権力・社会 ―ゆとり教育から入試改革問題まで―』青土社

小浜逸郎 1995 「個性という脅迫」（『教育学年報 4　個性という幻想』世織書房）

諏訪哲二 2005 『オレ様化する子どもたち』中公新書

土井隆義 2004 『「個性」を煽られる子どもたち』岩波書店

東浩紀 2001 『動物化するポストモダン』講談社現代新書

岩木秀夫 2004 『ゆとり教育から個性浪費社会へ』ちくま新書

貴戸理恵 2011 『「コミュニケーション能力がない」と悩むまえに』岩波書店

全国不登校新聞社編 2020『続 学校に行きたくない君へ』ポプラ社

苅谷剛彦 1995 『大衆教育社会のゆくえ』中公新書

苅谷剛彦 2020「教育改革にひそむ「主体性」「平等主義」という名の落とし穴」（https://globe.asahi.com/article/13166629）（2020 年 8 月 31 日閲覧）

堀尾輝久 1994 『日本の教育』東京大学出版会

小此木啓吾 1980 『ジゾイド人間』朝日出版社

西平直 1993 『エリクソンの人間学』東京大学出版会

M. メルロ＝ポンティ 1993『意識と言語の獲得　ソルボンヌ講義 1』木田元・鯨岡峻訳、みすず書房

[1] 一般には江藤淳『成熟と喪失』（1967）の文明批評におけるエリクソン理論の紹介に始まり、土居健郎『甘えの構造』（1971）や小此木啓吾の一連の精神分析学的な仕事が教育学に影響を与えた。大阪大学の森昭『原点なく方向なき時代の自己決定への教育』（1970）を参照。ちなみに、田中耕太郎の教育目的論を批判した森昭の意図について、吉澤昇は次のように指摘している。「大文字の他者＜神＞ではなく、複数の小文字の他者たち＜隣人たち les autres＞の内に、人間的経験の鍵があることを、森教授は言い残しているのではないか」[吉澤 2010]。つまり、田中耕太郎はキリスト教的な教育観をベースに、「究極的な教育目的が超越的な世界から天下ってくる」という教育観を持っていたが、それに対して森が一貫して違和感を表明していたということであろう。なお、アイデンティティ論の提唱者であるエリクソン自身は、普

遍へとつながるような「アイデンティティの彼岸（beyond identity）」なる概念を提起している。これは心理社会的なものであるアイデンティティを超越しそれを越えて生き残る「人間の核心」であるとされている。

[2] 吉澤昇は、普遍主義的な人格の完成論からアイデンティティ論・個性論へという思考枠組みの萌芽が、すでに西欧において（神学から教育学が分離した）18 世紀の後半から 19 世紀に存在していると指摘している。特にルソーにおいて、普遍的な到達目的をもった人間像が否定され、人間が自由に己の人生の歴史を持ちうることが肯定された。こういった「自然法的思惟枠組みから歴史主義的思惟枠組みへ」という学問の方法論的転換こそが、今日の「人が自分で自分の個性的な人生という作品を自由に創作する」という意識のはじまりに存している。「ルソーが、究極的な到達目的たとえば人格の完成などを根源的な価値とせず、プロセスとしての自由を根源的な価値としていることが、人間の教育についての基本的な枠組を、根底的に転換し、自然法的思惟から離れていったのです」。その上で、吉澤は、普遍性や規範から自由になった歴史主義は、歴史相対主義もしくは状況追随の順応主義に堕する危険があると指摘する。「ナチズム、ファシズムが社会を支配したのは、歴史的相対主義、歴史の規定性を受動的に理解した、悪しき歴史主義に責任があったのではないか」[吉澤 1988: 22, 25]。

[3] より穿った見方では、「正統的な教育」と「非正統的な教育」の間には、宗主国と植民地の関係、もしくはオリエンタリズムと似た構造が存在するだろう。すなわち、正統は非正統から一部を横領する。他方で、残余を外部に締め出す。「個性重視の教育」を非正統として外部に締め出す一方で、魅力あるものとして一部を取り入れていく。俯瞰して見るなら、個性論は多くの教育論の触媒として存在しているともいえるだろう。

[4] 堀尾輝久の「地球時代（グローバル・エイジ）」という概念が想起できる。堀尾は、ナショナルなものを越えて人権と民主主義が地球規模で拡大し、多文化な社会を実現していくという文脈でこの言葉に注目していた。しかし、それは堀尾自身も自覚しているように他国籍企業の論理と距離的に近接してしまう危険がある[堀尾 1994]。

[5] 松下佳代は、DeSeCo のキー・コンピテンシーについて、単に企業からの人材養成的な側面だけではなく「個人が「環境の期待の虜」にならず、社会化の圧力を対象化し、省察し、再構成するため、批判的なスタンスをとることが担保されている」と指摘している[松下 2010]。この社会化とその相対化という二つの側面についての分析は、以下の拙論を参照されたい[秋山 2016]。

[6] くわえて、メルロ＝ポンティは、「大人がおのれを知ることと子どもを教えることとは同時に起こる」とも言っている[メルロ＝ポンティ 1993: 131]。つまり、子どもの個性を伸ばすといった教育行為は、大人の側の「それを行う当の自分自身は何者なのか」という教育主体の自己認識の問いと不可分なものであるということだろう。本小論の「おわりに」を参照されたい。

[7] 貴戸理恵は同様の事態を「関係性の個人化」と呼んでいる[貴戸 2011]。

[8] 「大学入試改革で広がる「ＡＯ化」　推薦・ＡＯ入試合格ランキングで見えた「強い」高校」（『AERA』2019 年 11 月 4 日）

[9] 苅谷剛彦は、『大衆教育社会のゆくえ』（1995）のなかで既に以下のように述べていた。「「個性」のように解釈に幅のある基準を選抜に用いる場合、階層文化から「中立的」に見える学力というものさし以上に、子どもの育つ家庭の影響を受ける可能性がある。個性を重視するといっても、すべての個性に価値が与えられるわけではない。また、どの子どもも、高い価値が置かれる個性の持ち主とは限らない。個性もまた、不平等に存在している可能性がある」[苅谷 1995: 210]

[10] 「「ハングリーであれ。愚か者であれ」　ジョブズ氏スピーチ全訳　米スタンフォード大卒業式（2005 年 6 月）にて」『日本経済新聞』（https://www.nikkei.com/article/DGXZZO35455660Y1A001C1000000/）。2020 年 8 月 31 日閲覧。一部、翻訳を変更した。

[11] 状況によって人格を使い分けることが現代社会において適応的な振る舞いであることは、はやくは小此木啓吾が「ジゾイド（分裂）人間」なる言葉を使い指摘していた。いわく「都市化した世界では、人と人は部分的にしかかかわり合えません。人格のそれぞれの場面での使い分けや演じ分けが、むしろ必要な適応形式になってきます」[小此木 1980]。その後、東浩紀は 2001 年に『動物化するポストモダン』のなかで、私たちの社会そのものが、多重人格的なモデルを強く求めてきたこと、解離的な人間であることがポストモダン社会では適応的であることを指摘している[東 2001]。さらに東の理論を前提にして岩木秀夫は次のように述べている。「われわれ大人が、じぶん自身、このポスト産業社会において散乱した自我を、「心の専門家」や「安全の専門家」、そしてまたお仕着せの「国民」アイデンティティに頼ることなく、いかにして一つにまとめるのか」[岩木 2004: 230]。次世代を「教育する」という作業は、このような課題を問いかけてくるとされている。

[12] 西平直のエリクソン解釈を参照した[西平 1993]。

[13] インタビュー：朝井リョウさん「素晴らしき“多様性”時代の影にある地獄」（https://www3.nhk.or.jp/news/special/heisei/interview/interview_07.html）。2020 年 8 月 31 日閲覧。

[14] 「曖昧なものである個性」が重視される不分明な時代においては教育する側にも自己不安がつきまとう。その反動として、エビデンス中心の教育学などが登場するのかもしれない。